

第 25 期日本学術会議健康・生活科学委員会看護学分科会  
第 1 回会議録（概要版）

開催日時：2020 年 11 月 15 日（日） 9：00～11：00

場所：ビデオ会議

参加者：小松、多久和、西村、浅野、井上、太田、片田、萱間、神原、坂下、真田、新福  
（記録）、田高、菱沼、三重野、南、森山、山本、吉沢、綿貫

欠席：寶金

（敬称略）

資料

0. 第 25 期看護学分科会 第 1 回会議次第

0-1. 第 25 期看護学分科会設置提案書

0-2. 第 25 期看護学分科会委員名簿

1. 連携会員 健康・生活科学委員会資料

2. 「地元創生」提言

3. 「ケアサイエンス」提言

4. JANS40-JANA セミナー「地元創生」資料

5. 政府による日本学術会議第 25 期新規会員任命見送りによる学術の独立性毀損に関する  
声明（案）

【議題】

1. 看護学分科会委員長の選出

委員長に小松委員、副委員長に西村委員、幹事に萱間委員、新福委員がそれぞれ任命され、承認された。

2. 看護学分科会のメンバー構成について

小松委員長より、24 期からの継続メンバーと、25 期からの新規メンバーで構成される 21 名で看護学分科会が構成されることとなった説明があった。

各メンバーより、自己紹介と看護学分科会への考えを共有した。主に少子高齢化、COVID-19 の社会の転換期における看護学の役割、24 期で提言された地元創生やケアサイエンスの重要性、高度実践看護師のあり方についてどう進めるべきかに関する意見が出された。特に 25 期では提言からの発展や具体的な活動を望む声が多かった。JANS40 における JANA と共同での提言に関するセミナーが紹介された。

### 3. 25期の活動計画

小松委員長より、看護学分科会の中で、グループに分かれて活動した後に分科会に持ち寄って話し合うといった活動方法が示された。議論を通して課題を焦点化することが必要であるとされた。

#### (1) 地元創成看護班

綿貫委員より、JANS40内のJANAとの共催セミナーの内容が説明された。南委員より、セミナーは提言の説明をするだけでなく、COVID-19の今日的課題も含めて自分の地元にどう応用できるかという、会場の中で次のステップに移っていく議論を目指すことが伝えられた。

小松委員長より、提言は6大学の経験を元にした素晴らしい内容であったことが伝えられた。提言が社会にどう生かされたか検証をする必要性、提言によって社会の発展が動いているか、地元創生の部分は発展的に行なっていけるのではないかと。新しい看護の創生という挑戦的な活動であり、25期の全体でどう動いていくのか期待していると発言があった。

#### (2) 高度実践看護班

井上委員より、前期の提言の経緯に関する説明がなされた。高度実践は2回の提言を10年前から行なってきたので、今度の提言は制度作成に繋がる内容であったが、査読は制度全体に否定的であったこと、看護に理解のある法曹家に助言をもらったが、時期尚早と言う意見をもらい、提言に至らなかったと説明があった。提言に結びつけるには、周辺からムーブメントを作っていく必要性があり、今回看護学だけの集まりの中からでは説得力の壁があった。医師や他の医療職、法曹家、一般市民、介護の人々も含めて、高度実践も打ち出していきたいが、世の中の状況も変わってきたので、看護はどのような貢献ができるのか、仕組みを変えるような提言が必要ではないかと伝えられた。

井上委員の説明を受け、使用する言葉を工夫するなど、伝わりやすくしていく方向で議論がされた。

小松委員長より、専門職の役割拡大は引き続き行っていく方向性が示された。色々な人の意見、特に第二部の先生との連携の必要性和、看護協会の意見を聴きながら進めた方が良いと提案があった。向かうところは看護師の役割拡大であり、そこに向けた活発な意見交換をしていきたいとあった。

#### (3) 25期で他に扱いたい課題について

小松委員長より、25期は21名になって人数が増えており、上記2つの班は継承して活動を行っていく、あと2つ程度新しく課題を挙げて取り組んでいくのが良いのではないかとという方向性が示された。

森山委員より、地元創生につながるが、診療所に能力の高いナースを配置し、必要なケアやケアコーディネーションを提供していく仕組み作りに関する提案があった。高度実践看護師と連携したい医師や、その仕組み作りを希望する人も多いこと、医療と介護の一体的実施が義務化され、データが結合され、健康問題、介護問題を抽出することを義務化されているが、そこに入れる看護師がいない問題がある。制度に沿って高度実践看護師を配置していくことで、地元創生に結びつくのではないかと発言があった。

南委員より、森山委員のような課題に、過去に行政や看護協会と一緒にやることで成功した例が示され、看護系のリーダーたちにその方法を伝え、地元の健康問題を考えていくブレインとなることの必要性と、行政へのアプローチとして仲間づくりからやっていくことが必要であることが語られた。

新福委員より、若手研究者の抱える課題、特に研究力の強化について課題があるが、どのような活動にできるかは今後詰めていきたいとあった。

小松委員長より、近々また分科会を開催し、課題を決めていきたいとされた。教育研究についても含めていく必要があると述べられた。今後の方針として、班の活動だけではなく、分科会としての機能的な活動を常に意識して動いていくとされ、社会との接点を意識して、活動の拡大や、接点を広げることが重要であること、看護協会や JANA、JANS や JAMPU との連携を確認しながら進めることの必要性が語られた。教育も変革期にあり、看護学分科会としてやるべきことを確認するなど、機能的な部分を確認しながら進める必要があり、これらの機能的な部分は、委員長、副委員長、幹事で整理をして、次回の分科会で資料を出して、広がりやつながりをどうしていったら良いか、委員が目掛けていくものを作っていくと示され、承認された。

#### 4. 次回の分科会開催について

小松委員長より、これからどのように力を注いでいくかを慎重に考えていきたいため、12月にオンラインでまた分科会を開催したいこと、ケアサイエンスはまた次回に議論することが提案され、承認された。

以上